

般若心経 メタモデリング的抄註

廣瀬 康行

琉球大学医学部附属病院医療情報部
hirose@hosp.u-ryukyu.ac.jp



今世紀は知の競争時代なのだそうであり、またスピードを求めらる e-Business の要請からなのか、オン
トロジーやメタモデリングが取り沙汰
される昨今である。ただそれら自体
が目的目標ではないだろうし、また
情報関係者の専売主題でもなければ、

西欧文化に根ざした思索が先進しているわけでもない。

このあたりについて、般若心経を抄註するという形式
をとりつつ、仏法（仏教ではない）の空観を題材として
メタモデリングを再考しようと思う。気軽にお楽しみい
ただきたい。なお般若心経の解釈は宮坂有洪氏¹⁾に依
拠している。

我

我とは何か？ 我が我たる根拠は何か。我が他ではな
く我であることをいかにして知り得るか。仏法では次の
ように考え、これらを五蘊（心的経験主体を構成する基
幹要素）と呼んだ：(1) 身体がある、(2) 身体感覚がある、
(3) 表層意識がある、(4) 深層意識がある、(5) 識別し、
思考し、判断し、決断し、行動する。

五蘊：＝色 受 想 行 識

そして法（事象：instance/event）とは五蘊において表
象され、互いに原因や条件や契機あるいは素材となって、
因に縁って生じ滅する縁起である、と観じた。

諸法：＝十二因縁（無明 行 識 名色 六入 触
受 愛 取 有 生 老死）

六入：＝六根（眼 耳 鼻 舌 身 意）

六境（色 声 香 味 触 法）

つまり諸法とは、私の心的経験内容を構成する要素

object である。よって十二因縁とは、諸法を、苦厄の生
滅過程における因果系列と目した際の謂いである。なお、
このような systematics あるいは ontology は仏法の入り
口にすぎない。

世界認識

五蘊とは私の構成要素ではあるが、五蘊そのものは我
自身ではない。となると、我とは一体どこに存するであ
ろうか？

この問はインド思想史における認識論の核心部分と関
連し、またそれは言語枠組に起因していると考えられて
いる。というのも、サンスクリットでは実体 *i* には属性
a があると描出し、また「容器には無がある」と描出し
て「空の容器」なる事象を主張する。

つまり思考と概念の根幹において、すべての事象を実
体と属性とに分離して世界認識するという枠組みがイン
ドの伝統哲学であった。たしかに属性なき実体も実体な
き属性もあり得ず両者は不可分であろう（当該レベルに
おいては）。

しかしたとえばクラス *c* は他のクラス *c++* の属性と
なり得るという事実から、クラスも属性も根源的には（つ
まりより高い／深いレベルにおいては）独立可能であり、
かつそれらの間に厳密な境界線を引こうとする態度は不
適である、という主張もまた確からしく聞こえる。

であれば、クラスと属性とを厳に分離する思考パラ
ダイムとは思惟が産んだ虚構であると主張したのが
仏法だった。この根源的な認識論の差異は、種々の
modeling framework まで連なる伝統的かつ正統なる西
欧哲学と、それへのアンチテーゼであり続けているよう
に思える。

ドラマ設定と思索レベル

観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空

卓抜した求道者が深遠なる般若波羅蜜多を行じた時、

我が身は五蘊、しかも五蘊は皆空なり、と照見した。

般若心経は観自在菩薩と舍利子との対話であり、この
対話自体が仏陀の瞑想である、という構成となっている。
また般若心経なるドラマは同時に、次のような思索レ
ベルを暗示している。

一階：無明 : 不分離混淆 : 非表現

二階：自我 : 通常世界 : 表現

三階：無我 : モデリング : メタ表現

四階：空相 : メタモデリング : メタメタ表現

五蘊という「観」は舍利子のいる三階、五蘊皆空という
「観」は観自在菩薩のいる四階である。ヒトは抽象度の

高い／深い洞察を得るごとに階を昇っていく(超越する；
厭離する)。

諸法縁起

ところで五蘊とは諸法の原型かつ生成素であった。よって五蘊はクラスや派生クラスを包含する集合を形成する、とも言い得る。そして我が五蘊の複合によって成るならば我は固定的たり得ず、むしろ縁起であって無我と認識せざるを得ない、という仏法の基本的な立場に到ることとなる。

諸法縁起：＝諸法無我

さて諸法は、いかにして我なる存在を形成し得るのであろうか。構成体 object が構成される際、構成要素 object の存在は必須である。また object 間の結合や非結合にかかわる契機や制約を想定せざるを得ないことになる。仏法では、このような結合作用子を得、また非結合作用子を非得と言う。諸法縁起とは、まさにモデリングによる世界認識そのものであり、またその枠組みはクラスと属性とを峻別しないゆえ相当に自由である。

論

諸法からの解脱という目的においてはここまでの思索で十分であり、般若経ならびに般若心経では五蘊・十二処・十八界までの分類にて了としている。なお処も界も、サンスクリット原義では「私の根拠」と解釈される。

論師は法灯を守りつつ諸法を詳細に分類整理して精緻に体系化した。しかし次第に諸法を絶対視し、かつ実在視する方向に傾倒していった。言い換えれば、classification や taxonomy が世界理解でありそのすべてである、という誤謬の陥穽に嵌ったわけである。

諸法空相

そこで法に対する本来の「観」を明示的に再確認するためには、より上位レベルにおける新たな思惟枠組の提示が必要となった。すなわち、我を五蘊という法に解体したように、今度は法を否定することなく法を解体する必要に迫られた。

無色無受想行識 .. 無得無所得

法を解体したならば、そのレベルの思索においては、もはや通常のクラスも属性も存在しえないゆえに諸法空相である。そして得も非得もない(とせざるを得ず)ゆえに諸法の結合もない。なぜなら具体的な結合作用子を投入したなら法が生じ結合する、つまり諸法縁起に還ってしまうからである。よって得非得を供して特定のモデリングを促すような視座さえなく(前提せず)、つまりは、

そのような軸性をも放下したのである。

空の力と豊潤

しかし空とはけっして空虚なのではなく、ましてや虚無や虚無主義との混同なぞ甚だしい誤解にすぎない。そもそも空に到るには自我そして無我を渡ってきているのであって、その過程なくしては空観に達することもなかった。むしろ空とは、それらを自在に生成せんがための思惟の帰結であり、よって自由で豊潤な広がりを実現する力を内包しているのである。

不生不滅不垢不淨不増不減是故空中

メタモデリングを為すには素(meta meta-entity)とメタメタ表現とが必要となるがゆえに、それら自体は不増不減、不生不滅である(とせざるを得ない)。そうでなければ五蘊という観に還るからである。また特定の軸性や視座を前提しないということは、特定の価値基準から解き放たれていることを意味するので、淨不淨がありようはずもない。

空なる meta-modeling framework に到ることで特定のモデリングや思索、特定の modeling framework が孕まざるを得ない限定性とそれへの固執を超越し、寂滅しえた。そのうえで空は、生成、すなわち特定の枠組みにおける表現と認知とを強く促しているのである。

観

観自在菩薩 .. 度一切苦厄

斯くして観自在菩薩は一切の苦厄を度したもうた斯くの如き自在を得たればこそ統御すべきは、法をいかに観るか、すなわちいかに創るのか、その視座のみとなった。そして観自在である。

情報の扱い

情報関係者がメタモデリングあるいはオントロジを思索する際にも、ここ般若心経の世界には豊饒なる示唆を見出し得るものと思われる。CDIF や MOF/CWM ほか秀作または有用だとしても、心経から学ぶところはまだ少なからずと感ずるのは筆者だけではない。

なお筆者は、観を重んじた情報モデルもしくは meta-modeling framework をデザインし、これに基づいて簡易な電子カルテシステムを試作してみたので諸兄の参考になれば幸甚である²⁾。

参考文献

1) 宮坂有洪：般若心経の新世界、ISBN 4-409-41057-1。

2) 廣瀬康行：https://csx.hosp.u-ryukyu.ac.jp/

(平成 17 年 4 月 16 日受付)